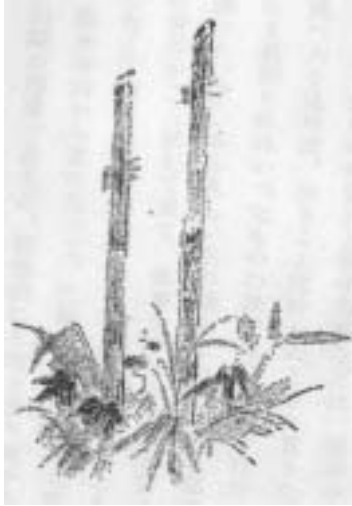


鹿 6 鹿の毛祀り = = = 猪・鹿・狸より



毛祀り

狩人が鹿を撃った時は、その場で襟毛を抜いて山の神に祀ったことは、猪狩りの毛祀りと何ら変わったことはなかった。ただ鹿に限っての慣習として、その場で臓腑を割いて、胃袋の傍にある何やら名も知らぬ、直径一寸、長さ五、六寸の真っ黒い色をしたものを、山の神への供え物として、毛祀りと一緒に、串に挿し、あるいは木の枝に掛けて祀った。これをヤトウ祀りと言うた。ヤトウは前にも言うたが、やはり串であった。その真っ黒いものは何であったか、狩人の悉くが名を知らぬのも、不思議だった。賢(臍)臓だろうと言うた人もあったから、あるいはそうかも知らぬ。ずっと以前は、両耳を切って、ヤトウ祭りをしたと言うが、近世では耳の毛だけを串に挟ん

で祀るものもあった。しかし後には臓腑を割くことをも略して、ただ毛祀りだけで済ましたものもあったと言う。

狩人としては、一たび傷を負わした獲物は、たとえ二日か三日を費やしても、後をもとめて倦むことを知らぬのが嗜(たしな)みであると言うた。某の(熊十という)狩人は、ある朝早く、出沢(すざわ)の村のコヤン窪で、一頭の鹿を追い出した時、鹿はまっしぐらに峯へ向けて遁げ去った。それを何処までも追いついて、ある時は山続きの谷下(やげ)の村を追い通し、さらに引き返して出沢の村の東に当る藤生(ふじゅう)の峯に追い込み、峯を越してその日の午過ぎには、滝川の村に出た。またもや山に追い込んで、それからだんだん山深くはいり、日の暮方には滝川から一里半山奥の、赤目立の林に追い込み、またもや峯一つ越えて作手(つくで)の荒原(あわら)村の手前の舟の窪で、やっと仕止めたと言うた。一六の年から狩りをしたが、この時ほどの骨折りはまずなかったと言う。

同じ男が舟着連山の七村で、大鹿を追い出した時は、その鹿が峯から谷、谷から村と、終日めまぐるしいほど遁げ廻るので、何処までも追ってゆくうち、行く先々で、その鹿を目がけて鉄砲を放つものがあった。大方他の狩人たちも、目がけているとは予期していたが、最後に大平の奥に追い詰めて斃した時、そこへ集まって来た狩人を数えると、総勢三六人あった。しかもその狩人が放した丸は全部で一三発で、その一三発が一つ残らず中っていたには、呆れ返ったと言う。三十幾人の狩人が何の連絡もなしに、一つの鹿を一日追い通したのである。こんな馬鹿馬鹿しいことは、昔も聞いたことがないと、みんなして大笑

いに笑ったそうである。

そうかと思うと、狩人は一人で、獲物ばかりが多くて弱ったこともあった。ある時、出沢の茨窪(ばらくぼ)の人家の背戸へ一匹の鹿を追い込んだ狩人は、思いがけなく行く手の木立から、雄鹿ばかり七つ、もやもやと角を揃えて走り出したのに、狙いつける的に迷って、悉く逸してしまったことがあった。その狩人の話だった、狩りの運は別として、雄鹿が七つ角を揃えて駆け出したところは賑やかなもので、見た目だけでも豊楽であったと言う。

前の話もそうであるが、こうした出来事をすべて山の神の手心と言うたのである。